

第十回 福原徹 演奏会  
徹  
の  
笛



ごあいさつ

本日はご来場いただき誠にありがとうございます。

2001年にスタートしたこの「徹の笛」と題したりサイタルも、お蔭様でようやく10回目を迎えました。

「徹君おめでとう 貴公子のような徹君も、この世界で少しよごれてきた。もっともっとよごれる前、徹君の満を持したりサイタルが今日、催される。いろいろな難関を乗り越えて無で吹く笛の音を期待している。」

(師匠が第1回のプログラムに書いてくださった御挨拶文)

あれから18年、様々なことが思い出されます。

全てが試行錯誤の連続、本当に「ようやく」という感じがいたします。

今回も、「試行錯誤」に長い時間かけて付き合ってくださいました共演者やスタッフの皆さんをはじめ、多くの皆様のおかげで今日を迎えることができました。

また、ご助成賜りましたアーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、公益財団法人日本製鉄文化財団、ご後援いただきました各位に御礼申し上げます。

最後になりましたが、ご来場いただきました皆様方に改めて御礼を申し上げます。

本日はありがとうございました。

福原 徹

福原 徹 (ふくはら・とおる / 邦楽囃子笛方)

1961年東京生まれ。六世福原百之助(四世寶山左衛門・人間国宝)に入門、福原徹の名を許される。東京藝術大学音楽学部邦楽科卒業。邦楽囃子笛方として、長唄・箏曲などの演奏会、日本舞踊・歌舞伎の舞台、放送、海外公演等で、篠笛・能管の古典演奏活動を続けると共に、笛を中心とした作曲に取り組む。

2001年第1回演奏会「徹の笛」(津田ホール)を開催、平成13年度文化庁芸術祭大賞(音楽部門)を受賞。2002年~2003年、新作連続演奏会「徹の笛 in MUSICASA」を隔月で連続6回開催。2004年第2回、2006年第3回「徹の笛」(紀尾井ホール)開催。2012年よりリサイタルシリーズを再開、第4回~第9回「徹の笛」を王子ホール、紀尾井小ホール、東京文化会館小ホールにて開催。

東京藝術大学、洗足学園音楽大学、清泉女子大学、立命館大学等の非常勤講師を歴任。NHK文化センター(青山、浜松、名古屋、柏、岐阜)講師。また、東京、浜松、彦根などで指導にあたり「百笛会」を主宰。一般社団法人長唄協会会員。創邦21同人。大田まちづくり芸術支援協会アドバイザー。

文部科学省検定 中学校音楽教科書「中学器楽 音楽のおくりもの」(教育出版発行平成28年改訂版)著者。

CD : 「徹」「徹の笛」「lift off」ほか。



●  
プログラム

六世福原百之助(四世寶山左衛門)作曲

## 樹々の密

笛 福原 徹  
福原徹彦  
福原徹秋  
福原百貴  
福原邑佳  
正田温子  
富澤優夏

蓬萊泰三 作詩 福原 徹 作曲

## みち 〈初演〉

笛 福原 徹  
謡 小早川 修  
大鼓 福原百之助

福原 徹 作曲

## Dona nobis pacem 〈2019年版初演〉

笛 福原 徹  
合唱 NHK東京児童合唱団(合唱指揮:金田典子)

————— 休憩 —————

作曲者不詳

## 獅子

笛 福原 徹

福原 徹 作曲  
中川俊郎 ピアノパート作曲補佐

## 千年の桜 〈2019年版初演〉

1. 満開の桜
2. 竹
3. 皇帝の新しい服
4. 夢は枯野を
5. 千年の桜

笛 福原 徹  
尺八 善養寺恵介  
太棹三味線 鶴澤津賀寿  
ピアノ 中川俊郎

●  
作品ノート

## 樹々の密

花柳茂香の委嘱により六世福原百之助作曲。昭和49年(1974)初演。資料には「寂(しずもりふかく) 激(ふれゆるぐ) 密(ひめぐと)」とある。師匠自身は「森の中のいろいろなできごと」という説明をされていた。「北山杉の鬱蒼と茂った森。突然足元から鳥が飛び立ち、小さな祠にこけむす樹々、やがて鳥や虫たちの合唱が始まる。」

師匠の代表作の一つだが、この作品が師匠の作曲のターニングポイントになったのではないかと私は思っている。「嵯峨野秋霖」「飛天」「原野」いずれも「樹々の密」後に作られている。

今回は、師匠の直門、孫弟子、そして他流の若い(作曲者に会ったことがない)世代という、世代も作曲者との距離感も異なる人たちと共に演奏する。

## みち

蓬萊先生とは私がN児(NHK東京児童合唱団)で歌っていた時、そしてOBとして裏方のお手伝いをしていた時以来のご縁であった。

2006年の第三回「徹の笛」では「草の祈り」という作品を書いていたのだ。

昨年7月、入院中の先生をお見舞いした際、「うっちゃん(=徹)に作品を書く」とおっしゃって下さった。そして9月、作品を頂戴した。その一か月半後、先生は旅立たれた。

「みち」 蓬萊泰三

きょうも また

やまふかき みちを

ひとりゆく

ふえよ たからかに ひびけ

とりよ なけ

蓬萊泰三(脚本家・作詞家/1929~2018)  
神戸大学文学部卒。NHK大阪放送劇団員を経て脚本家となる。  
NHK中学生日記・幕末未来人・世界の音楽・「できるかな」・FMラジオドラマ・日曜名作座など多くの脚本の他、つくば科学万博日本政府催事ミュージカル「不思議の森の夕日」の脚本作詞を担当。作詞家としても、合唱組曲「チョコタン」「日曜日」「青春」「オデコのこいつ」「日記のうた」「ミイコ」「獅子の子幻想」など多くの作品がある。イタリア賞・文化庁芸術祭優秀賞・ギャラクシー賞・放送文化基金賞ほか受賞多数。

## Dona nobis pacem

ドナ ノビス パーチェム

2004年の第二回「徹の笛」で初演。その前年に「Kyrie(キリエ)」(長唄唄方による歌唱と笛)を発表していた。その続編をどうするか逡巡した結果、子供の頃に所属していたN児に共演してもらうこととした。

その後、2009年のCD「lift off」収録の際に改訂。それ以来、10年ぶりの演奏である。今回さらに手を加えた。

ドナ ノビス パーチェム (我らに平和を与えたまえ)



## 獅子

能楽「石橋」に登場する「獅子」。歌舞伎、長唄など各種の邦楽や舞踊にも取り入れられた。その獅子の出、そして激しく舞う部分は、囃子の曲としても大変魅力的である。今回は能管のソロ。出の乱序に替えて、長唄の獅子物によく使われる「楽」を少し吹く。

## 千年の桜

### 1. 満開の桜

初めて三春の滝桜を見に行ったのは、全く花の咲いていない寒い時期だった。樹齢千年の大木は、峻厳な生命力を秘め、静かにそこに「居た」。それから何年も経った春爛漫、満開の時期に訪ねて見上げると、大きな身体を揺すりながら「おお、よく来たな」と声を掛けられたような気がした。

### 2. 竹

「竹」（萩原朔太郎）  
ますぐなるもの地面に生え、  
すどき青きもの地面に生え、  
凍れる冬をつらぬきて、  
そのみどり葉光る朝の空路に、  
なみだたれ、  
なみだをたれ、  
いまはや懺悔をはれる肩の上より、  
けぶれる竹の根はひろがり、  
すどき青きもの地面に生え。

### 3. 皇帝の新しい服

いわゆる「裸の王様」として知られているアンデルセンのお話だが、その結末を私は勘違いしていた。行列を見ていた子供が、王様は何も着ていないと言ってしまい、やがて人々も口々に叫ぶ——そこでこの話はおしまい、と思っていた。しかし本当は、いまさら行列をやめるわけにもいかないということで、王様は一段と胸を張り、側近たちはありもしない裳裾を捧げ持ったまま、行列を続けて行くのである。

### 4. 夢は枯野を

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る（松尾芭蕉）

### 5. 千年の桜

2004年の「千年の桜」以来、生き続け変え続けている章である。千年の長きにわたり、そこに立ち続けている大木。しんしんと降り続ける花びら。

## 福原徹さんについて

## 中川俊郎

世の中には組織を守る役割のひとと、組織を更に高次元の覚醒した集団に「作り替える」役割・使命のひとがいる。これは本当に大雑把で乱暴な分け方だが、頑固なひとと柔軟で自由なひとと言ってもよい。また「自由じゃなきゃだめだ」…と他人に押し付け見せびらかすのも頑固なことに変わりはない。こういう人もいる。

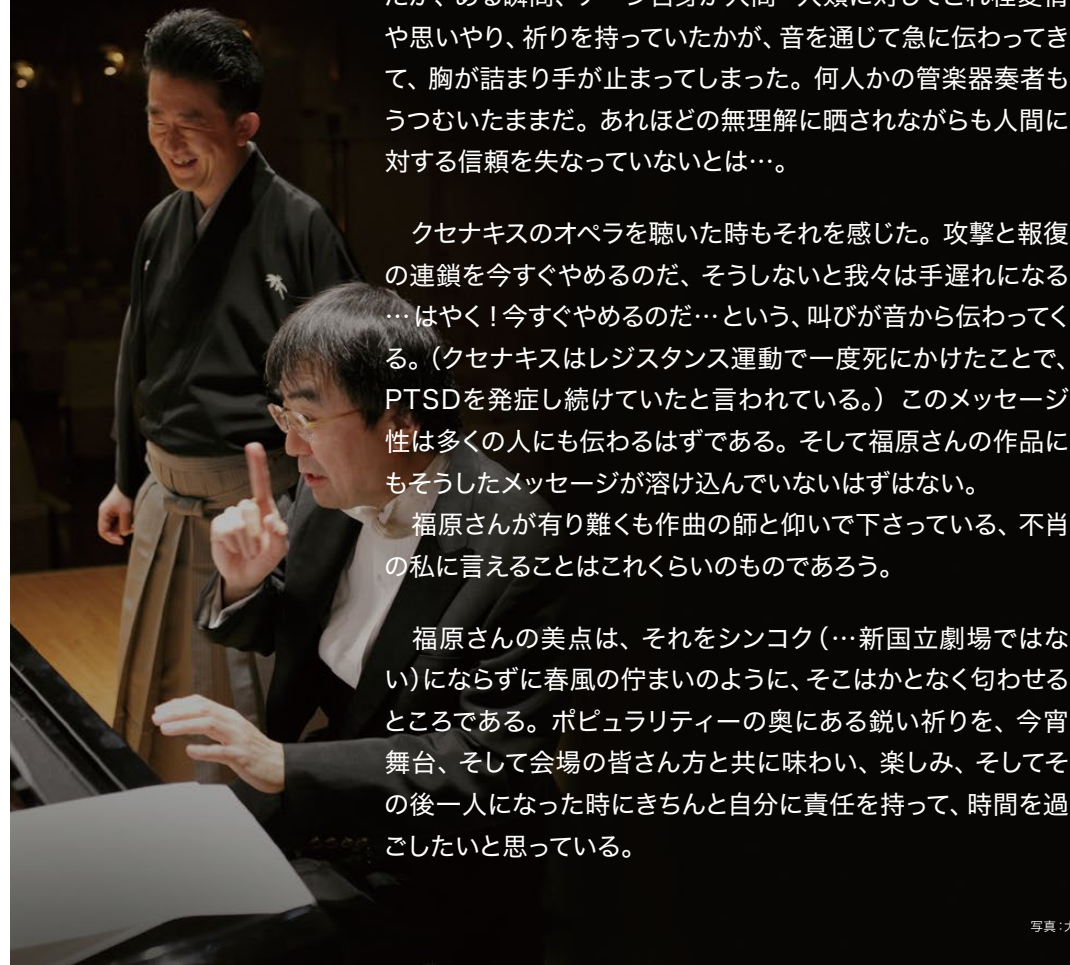
組織・集団を解体し再構成し直すためには、（もとより使命というものは本人はハッキリと自覚していないことが多いが）それに属しそれをよく知り、かつ他人に対する愛情に溢れている（相手がどんなひとでも）ことが重要である。これは大変エネルギーを使うことだ。その作業には何千年もかかることもある。桜の大木の過ごす時間のように…。福原さんは正にそれが可能なそして現実に成果をあげつつあるひとである…せいぜい健闘を祈る！と言い切ってしまうとこの原稿はお仕舞い、という手もあるが、それではあまりに無責任だ（笑）し、味気ない。

そこで、私個人のジョン・ケージのプリペアドピアノと管弦楽の協奏曲のリハーサル時の体験を述べたいと思う。始めはケージの構成した音楽の美しさに驚嘆しながらピアノに向かっていったが、ある瞬間、ケージ自身が人間・人類に対してどれ程愛情や思いやり、祈りを持っていたかが、音を通じて急に伝わってきて、胸が詰まり手が止まってしまった。何人かの管楽器奏者もうつむいたままだ。あれほどの無理解に晒されながらも人間に対する信頼を失っていないとは…。

クセナキスのオペラを聴いた時もそれを感じた。攻撃と報復の連鎖を今すぐやめるのだ、そうしないと我々は手遅れになる…はやく！今すぐやめるのだ…という、叫びが音から伝わってくる。（クセナキスはレジスタンス運動で一度死にかけたことで、PTSDを発症し続けていたと言われている。）このメッセージ性は多くの人にも伝わるはずである。そして福原さんの作品にもそうしたメッセージが溶け込んでいないはずはない。

福原さんが有り難くも作曲の師と仰いで下さっている、不肖の私に言えることはこれくらいのものである。

福原さんの美点は、それをシンコク（…新国立劇場ではない）にならずに春風の佇まいのように、そこはかとなく匂わせるところである。ポピュラリティーの奥にある鋭い祈りを、今宵舞台、そして会場の皆さん方と共に味わい、楽しみ、そしてその後一人になった時にきちんと自分に責任を持って、時間を過ごしたいと思っている。



# 福原 徹と「徹の笛」

金子 泰

邦楽古典曲からバッハ、シェイクスピアまで。

笛独奏から異種楽器とのコラボレーションまで。

「やりたいこと、思い付きを次々とやっているだけ」と言う福原徹さんの、

「思い付き」の源には何があるのだろう。

その演奏会は。その言葉から見えて来るものは、何か。

## 音楽の力

「公演チラシにも書いていることですが、僕は音楽の力を信じていて、何かの形で人を救いたいと思っています。たとえば辛い思いをしている人が、音楽を聴いたり感じたりすることによって、少しでも先に進めるとか、人に少し優しくなれるとか。即効性があるかどうかもわからないし、たやすいことではないのですが、連綿とやればきっと実現できると信じている。というのも、僕自身が音楽を聴いて感動して、救われてきた人間なんです。だから僕が作る音楽も、そういうものでありたいと思っています。」

のっけからすごい話になってきた。

「もちろん絵でも言葉でも、芸術の力はあらゆると思います。芸術は人を感動させる。僕はレンブラントが好きなんですけれども、時代も違う、国も違う人間が（つまり自身が）、彼の絵を見たいがためにはるばるオランダまで行ったりするわけです。そういう力が芸術にはある。」

音楽の力を信じる。

「僕は子どもの頃合唱団に入って歌っていて、同じ頃に長唄もちょっと齧っていた。それから変声期を迎えて音楽から遠のいていたのですが、高校2年の時に笛と出会いました。

笛をやっている人間だから言うわけではないですが、笛の音はとくに心の奥を刺激するのではないかと思いますね。だとしたら笛を吹く意味もありますよね。これは後付けの理屈なんですけれども。もちろん世界を救おうと思って吹いているわけではなくて、やはり自分が吹きたいから吹くわけですけれどもね。」

なかんずく笛の力を。

「今こうして笛の演奏会をやって、自作曲を演奏したりしていますが、僕の場合は笛だからこそ作曲できるのかもしれないと思っています。」

そうだ。福原徹さんにまつわる謎を解くには、まず笛のことを聞かねばならない。

## 笛

「笛というのはとてもプリミティブな、素朴な楽器です。洋の東西を問わず過去の話の中にもよく出てきますし、ポピュラリティを持っています。宗教儀式で使われたりすることもあります。立って吹ける。座ってももちろん。ひとりで野山に行って空を見ながら吹くこともできる。片や楽器として見ると単音しか出ない、音域が狭い、ピッチが高い。つまり様式の中に入ると、途端に伴奏役になってしまいます。もちろんその中でも重要な

役割を担ってはいるのですけれども、笛本来の魅力と、音楽の様式の中での笛の魅力とに距離があるように思います。」

古典曲の『ゆき』や『越後獅子』などを笛独奏で上演するのは、その間を埋めようという気持ちなのだろうか。

「それよりは、唄や三味線に頼らず笛の音色と一本の音の線にして、その曲がどういふのか見通そうという、言うなれば作曲の手前の段階の試みという位置づけでしょうか。」

笛が主役になる曲がなかなかない。ならば作るしかない。

「笛だけの曲や笛が主役の曲がもっとあっていいと思います。笛という楽器にはもっと可能性があって、今あるよりもっといろいろなことをさせられると思うんですよ。作曲家に委嘱するのでもいいけれども、笛吹きも作らなければいけないと思います。いろいろな試みをいろいろな人がどんどんしていった方がいいのです。寶先生もお作りになっていました。先生の曲は様式を抜きにしても美しい。」

徹さんが師事した四世寶山左衛門師は、笛の曲をたくさんお作りになった方だ。

「僕はもともと作曲には不思議なくらい興味というか関心がなかった。それが寶先生のお供をするようになると、必然的に先生が作るところを目の当たりにするわけです。舞踊の花柳茂香さんとよく作っていらしたのですけれども、その現場にいるのがすごく面白くてね。振りがもう出来上がっていて、それに先生が曲をつけるのです。それを受けてまた振りが変わっていく。禅問答のような会話があたり、変わっていき方が一期一会的でもあり、感性のぶつかり合いという感じでした。笛だからこそできることなのかもしれませんけれども。」

そして自身も作曲をするようになる。最初のCD『徹』を35歳の時に出す。40歳で今はなき津田ホールにて第一回福原徹演

奏会『徹の笛』を開く。この演奏会で平成13年度文化庁芸術祭に初参加、大賞を受賞したのだが、これも4曲中3つが自作の初演曲。1曲目の『うた』は笛の独奏だ。

邦楽の人が、ひとりで歩いて舞台中央に出るのは、怖くないのだろうか。

「それは怖いですよ。でも正座して緞帳が上がるのでも、舞台の真ん中で独奏するのだったら怖いと思うでしょう。歩いて出ていくのは、勇気は確かに要るし緊張もするけれども、その時にその場の空気を考えるんですよね。」

空気を読むということ？

「いや、お弟子さんにも言うんですけども、笛の音というのは、自分で作るというよりも空間に音が既にある、糸玉の端っこみたいなものが出ていて、切れないようにそっとそれを出していくような感じだと思うんです。だから空間によって音も変わるわけです。歩いて舞台に出ていく時には、出ていながらその空気の中に自分も入る。自分もその一員になるわけですよ。」

なにやらこれも禅問答のようになってきた。

## ひと

やりたいことはどんどんやるし、ひとりではできない時は仲間を探して一緒にやる、という。最初のリサイタルで芸術祭大賞をもらった後、ムジカーザという小さい会場で連続演奏会をすることに決めた。

「ライブ形式で6回、隔月で1年かけました。毎回ゲストをひとり。最初と最後の回は洋楽の人にしよう決めていました。」

これが契機で中川俊郎さんと出会う。

「中川さんと初めて音を出したとき、笛の音がピアノの音に溶けるというか、引き込まれる感じがしたんです。それはなぜなのかわからないけれども。包容力のあるお囃子の先輩の



横で吹いている時と同じ感覚がありました。」

リサイタル『徹の笛』で拝見するお顔の多くが、この時のゲストの中に見られる。中で、三味線は太棹を選んでいるのはどうしてか。

「まず、ふだん古典曲では長唄の人と合わせることが多いので、細棹三味線だと気が変わらないということがありました。それから笛の音が高いので、一緒にやる楽器には低い音を求めること、そして太棹の持っているあの音の質感ですね。」

ピアノの中川さん、太棹三味線の鶴澤津賀寿さん、この少々あとから加わる尺八の善養寺恵介さんと共に、今回改めて『千年の桜』を演奏する。

「『千年の桜』と題した曲は第二回リサイタルが最初です。紀尾井の中ホールで、ムジカーザで得た仲間とで何ができるかを考えて、桜のことをやろうと思いついた。そこでいろいろと調べたら、古代には生命の象徴だったそうなんです。時代が下がるうちに散ることの美学の方に重きが置かれるようになり、戦争でそれがさらに強調されることになってしまった。でもそれは人間の勝手な都合でしかない。そんなことを思いながらあちこちから採った桜の歌を、謡と笛を中心にして、そこにピアノや太棹を入れて演奏しました。」

尤も、今回上演する『千年の桜』は、その中の福島県三春の桜のイメージで作った器楽部分を基にして作り直されたものだ。はじめは笛・太棹・ピアノの三重奏曲、それが笛とピアノの二重奏になり、笛・尺八・ピアノ版にもなり、現在は太棹も入って四重奏だが「もはやライフワーク」である。

「共演してくださる人達には多大なご迷惑とは思うのですけれども、打合せも練習も楽しくさせていただいでいて、本当に有難いと思っています。もちろんひとりよりは良くないですが、演奏する本人たちが面白く思っ

ていなかったら面白いものにはなりませんよ。」  
そういう楽しさの源は、「人間同士の出会いだ」と断言する。

「新作という未知のものをやるにあたっては、演奏する人や関わっている人が前向きになることが大きいと思うのです。僕の会に関わったことが次の何かにつながるようなものになってもらいたい。大変おこがましいけれどもそれが一番の望みなんです。聴いている人に対してもその姿勢は伝わるのではないかと思います。」

自身がターニングポイントと言う曲『キリエ』も、人との出会いがあって生まれた。

「キリスト教の大事な祈りの言葉だからと躊躇していたのを、意を決して笛と歌で『キリエ』を作ったのは、当時の世相(9.11の頃)からあの言葉を本当に叫びたい気持ちが強かったからです。そして僕が参加している創邦21に今藤政貴さんがいた。彼の佇まいや声が身近になかったら、あの曲はありませんでした。」

人選と配置の妙がある。そして、全身で事にあたってくれ、と求める。コラボレーションは演奏家にとどまらない。舞台裏のスタッフ、グラフィックデザイナーとも。さらには、『月光と海月』を通じて朔太郎とも、『ジャコンヌ』や『ゴルトベルク』を通じて大バッハともコラボレートしているのだ。その証拠にその詩、その曲がいつもと違った顔を見せているのではないか。

## 純化

津田、紀尾井、王子。そして東京文化の小。コンサートホールでの開催が多い。

「リサイタルを考え始めた頃、それまで邦楽用とされていたホールが軒並み建て替えられ、無くなり、皆困っていました。一方で

立派なコンサートホールがどんどん建っていった。そこでやろうにも残響が邦楽に向かない。緞帳がない。でもそうやって逃げていたら、ますます邦楽をやる場所が無くなるでしょう?そこで、開拓する気持ちでコンサートホールでやろうと決めたのです。」

コンサートホールで古典系の邦楽の人が演奏会をまだあまり開かなかった時代。

「そこでやれば、純粹に音楽だけを取り出して演奏することに挑戦できるのではないとも思っていますね。」

音楽だけを取り出す?

「舞台の上を飾らない。演出をしないということ。『演出をしないという演出をしたんですね』なんて言われたこともあります。」

前述のムジカーザも含め、やりたいことと場所は、はっきりリンクしている。邦楽用の紀尾井小ホールでは、演目に『マクベス』そして『ハムレット』を選んだ。

「というより『マクベス』をやりたい、だったら紀尾井の小ホールだなという考え方です。能楽師の小早川さんが出る、出入りや動きもある、といって能楽堂では新作能になってしまう。紀尾井の上(小ホール)でやればいいじゃないかと。そこでやる意味もはっきりしましたしね。」

全体を考えるのが好きという。どうやればできるかを考える。

「僕の持論は、物事には必ず方法があるということです。できないのは方法が見つからないだけで、それを探し出す。たくさん失敗もするけれども、たいがいのことはできるようになるんじゃないかと思っています。」

## 冒険

ここで話を冒頭に戻したい。邦楽の古典曲であり自作の新曲であり、『ゴルトベル

ク』、『ハムレット』であり。笛独奏でありまた異種楽器とのコラボレーションであるもの、それは何か。—— 答えは「音楽」だ。

「全曲を自作品にした第二回のあと、ひどく落ち込んでしまいました。鍛えてない身体でいい気になってボディービルの大会に出ちゃったような気がしたんです。たまたま中川さんにそう打ち明けたら、『それはね、福原さんが現代音楽の作曲家の仲間入りをしたということなんですよ。一緒にがんばっていきましょう』と慰められた。つまり覚悟の問題なんですよ。自分の作品を出すというのは非常に恥ずかしいことなのですが、でもそれは当然で、作曲をするというのはそういうことなんですよ。」

こうした覚悟を持って福原徹さんが全身全霊で示すものは、まさしく音楽なのだ。人類を包みこむ音楽に邦楽も洋楽もなく、古典も新作もない。そして自身が感動した音楽の力を、自身の音楽に願っている。

「僕は体当たりの作曲なんです。自分がかつて歌っていた延長で、歌いたいものを歌う、吹きたいものを吹く。ですから作曲家というよりシンガーソングライターですね。最後は演奏家の曲になると思うんですね。人の曲をやるにしても自分の曲にしないと意味がないと思っているんです。」

そしておそらくは、聴く人に対しても自分のものとして聴くことを願い、未知のものへの冒険を促しているのだ。

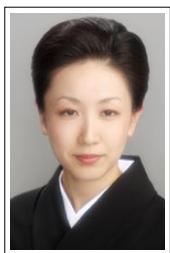
金子 泰 (かねこ たい)

1968年生まれ。東京大学文学部仏文学科卒業。今藤政太郎門下で長唄を修行。邦楽の作詞、舞踏台本などの執筆を手がける。主な作品に『春の歌』(NHK邦楽技能者育成会卒業演奏曲)、『死者の書』(折口信夫原作)、『鶴』(作曲に福原徹も参加)など。創邦21同人。



### 福原徹彦 (ふくはら・てつひろ／邦楽囃子笛方)

十歳の頃より六代目福原百之助師より笛の指導を受ける。十二歳で師の笛のリサイタルを助演。十六歳で福原徹彦の芸名を許される。その後、東京芸術大学 音楽学部 別科を修了し、平成7年、神職の資格(直階位)も取得。平成9年、歌舞伎(雀右衛門丈、富十郎丈出演)のフランス公演(パリ、ポルドー)に参加。平成16年、NHK 教育TV「いろはに邦楽」で横笛を担当。平成10年、21年、26年、29年国立小劇場に於て福原徹彦リサイタルを主催。現在、主に古典曲で活動している。



### 福原徹秋 (ふくはら・てつあき／邦楽囃子笛方)

邦楽囃子 福原流 笛方。福原徹彦師に師事。学習院大学文学部哲学科卒業。東京芸術大学音楽学部別科邦楽科修了。1997年 人間国宝 福原流四世宗家 寶山左衛門師より福原徹秋の名を許される。長唄演奏会、邦楽コンサート、日本舞踊公演などを中心に国内、海外にて演奏活動を行う。また、演劇やオペラ、新作能の舞台での演奏や、歌舞伎公演の録音等にも参加。2011年より東京都主催「キッズ伝統芸能体験」教室にて子供達への篠笛の指導を行う。一般社団法人長唄協会会員



### 福原百貴 (ふくはら・ひやくたか／邦楽囃子笛方)

福原徹に師事。東京芸術大学を卒業後、長唄邦楽囃子笛方として邦楽演奏会、舞踊会、海外公演、テレビやラジオ等、国内外で幅広く演奏活動をするほか、啓蒙活動等にも積極的に取り組む。またRockband AKARA TAKAとして、都内ライブハウスや海外公演等を行い、ドイツJapan-tag ではメインアクトとし1万人を熱狂させ、フランス ジャパンエキスポでは3万人の前でライブをする等、勢力的に海外活動を行う。古典囃子演奏集団 若獅子会にて、中島勝祐賞受賞。創造する伝統賞を受賞。



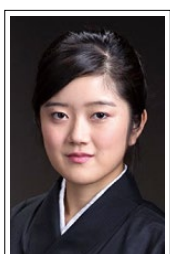
### 福原邑佳 (ふくはら・さとか／邦楽囃子笛方)

福原徹に師事。2005年 福原流四世宗家寶山左衛門より福原邑佳の名を許される。東京芸術大学邦楽科卒業、2010年 同大学院邦楽囃子修士課程修了。以後邦楽囃子笛方として演奏活動を行うほか、各学校教育現場やカルチャーセンターなどで古典芸能の普及に努める。2012年～2015年 東京芸術大学音楽学部邦楽科教育研究助手。NHK文化センターさいたまアリーナ教室・柏教室講師。一般社団法人長唄協会会員。



### 正田温子 (しょうだ・あつこ／邦楽囃子笛方)

13歳より邦楽囃子の笛を中川善雄に師事。東京芸術大学音楽学部附属高等学校、同大学音楽学部邦楽科、同大学大学院音楽研究科修士課程卒業。在学中、浄観賞、アカンサス音楽賞、大学院アカンサス音楽賞受賞。2010年中日青少年交流演奏会(北京・上海)、『12年日中青少年交流演奏会(東京)に参加。'14年第27回市川市文化振興財団新人演奏家コンクール邦楽部門優秀賞受賞。'15年'16年ロシア・モスクワ音楽院主催「日本の心」に出演。'16年ロシア・サンクトペテルブルク文化大学にて主催演奏会「邦楽コンサート&ワークショップ」を開催。'17年東京芸術大学邦楽科にて二年間音楽研究助手を務める。



### 富澤優夏 (とみざわ・ゆうか／邦楽囃子笛方)

群馬県沼田市出身。幼少期から沼田祇園囃子の太鼓を始め10歳より篠笛を始める。全国こども民俗芸能大会出場。笛を中川善雄に、お囃子を藤舎千穂、三味線を東音 新井康子に師事。現在東京芸術大学邦楽科3年に在籍。



### 小早川 修 (こばやかわ・おさむ／シテ方観世流能楽師)

1961年小早川泰士の孫として生れる。故祖父及び故浅見真高師に師事。1984年東京芸術大学音楽部邦楽科卒業。1986年同大学院音楽研究科修士課程能楽専攻修了。(公)能楽協会・(社)日本能楽会・(社)観世会・(公)鏡仙会会員。1968年「鞍馬天狗」花見で初舞台。1976年「小袖曾我」にて初シテ。「乱」「石橋」「道成寺」「翁」「卒都婆小町」「望月」を披く。毎月1回謡音読会・教員対象能狂言の教え方講座を始め、能楽の普及活動や現代邦楽とのコラボレーション等も行なっている。



### 福原百之助 (ふくはら・ひやくのすけ／邦楽囃子方)

1975年 常磐津文学子蔵(一中節家元、都一中)の長男として東京に生まれる。91年 祖父である福原流囃子方、四世寶山左衛門(六代目福原百之助)に師事。同年、望月太喜雄に師事。長唄を東音浅見文子に師事。93年 福原流笛方、福原徹に師事。94年 NHK学園高等学校を卒業。2006年11月 邦楽囃子福原流福原百之助派家元七代目福原百之助を襲名。邦楽演奏会・日本舞踊会の他にもワークショップやレクチャーコンサートなどの企画や公演を行い、日本の伝統芸能である邦楽の普及に努めている。また、アメリカをはじめ、上海、ドイツ、オーストリアなど、海外での公演にも多数参加している。社団法人長唄協会会員。邦楽囃子「若獅子会」同人。



### NHK東京児童合唱団

NHK東京児童合唱団は、1952年NHKの教育番組と子ども番組の充実を目的として創立され、NHKの放送出演はもとより、海外の合唱団との交流や国内の主要なオーケストラとの共演を重ねている。そして、「ゾルターン・コダーイ生誕100周年記念国際合唱コンクール」青少年部門第1位・総合部門グランプリなど、国内外の多数のコンクールに入賞。2009年には、NHK交響楽団とともに「天皇・皇后両陛下ご成婚50周年記念コンサート」に出演。そして、2016年には、NHK交響楽団創立90周年記念特別演奏会に出演、指揮者・パーヴォ・ヤルヴィの指揮の下でマーラー／交響曲第3番、第8番を演奏するなど、国内のオーケストラとの共演を深化させている。また、2018年海外演奏旅行～北欧・バルト諸国～で、音楽性の高い合唱演奏を披露した。



### 善養寺恵介 (ぜんようじ・けいすけ／琴古流尺八演奏家)

東京芸術大学邦楽科卒業、同大学院修士課程修了。6歳より、虚無僧尺八の手ほどきを受ける。同大学在学中は山口五郎師(人間国宝)に師事。1999年、第1回リサイタルを開催以来、現在に至るまで13回を重ね、2017年のリサイタルでは文化庁芸術祭大賞を受賞。2000年2月、尺八教則本「はじめての尺八」(音楽之友社刊)を執筆。2002年5月、日本伝統文化振興財団賞受賞。同年10月、世界銀行主催、世界宗教者国際会議(於 イギリスカンタベリー大聖堂)にて、招待演奏。2017年度、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。古典を中心とした演奏活動のほか、関東各地にて尺八普及のための尺八教授活動を行っている。公式website <http://zenyoji.jp/>



### 鶴澤津賀寿 (つるざわ・つがじゅ／太棹三味線)

昭和59年竹本駒之助に入門。三味線を、4代目野澤錦糸に師事。昭和61年5月、駒之助の義母、鶴澤三生の幼名鶴澤津賀寿を継ぎ、本牧亭にて初舞台。鶴澤重輝の預かり弟子となる。平成8年度第47回芸術選奨文部大臣新人賞(古典芸術部門)、平成9年度第11回清栄会奨励賞、平成11年度第4回ビクター伝統文化振興財団賞奨励賞(現、日本伝統文化振興財団賞)、平成21年 重要無形文化財総合指定、平成30年 第7回中島勝祐創作賞。現在、一般社団法人義太夫協会理事。

©山之上雅信



### 中川俊郎 (なかがわ・としお／作曲家、ピアニスト)

桐朋学園大学作曲科卒業。作曲を三善晃、ピアノを末光勝世、森安耀子の各氏に師事。<Music Today '82>10周年記念国際作曲コンクール第1位。1988年村松賞、2010年、サントリー芸術財団主催「作曲家の個展2009、中川俊郎」の成果に対して第28回中島健蔵音楽賞を受賞。CM音楽界においても「ACC賞」など受賞多数。東芝EMIから、自作のサントリー「烏龍茶CM曲シリーズ」を収録したCD「chai」、「cocoloni utao」などを、またフォンテックからCD管弦楽作品選集「沈黙の起源」、299 MUSIC からピアノ作品集「メッセージ/佐藤祐介×中川俊郎」をリリース。日本作曲家協議会常務理事、お茶の水女子大学非常勤講師。



## 徹の笛 福原徹演奏会 \* 共演者のお名前は、出演当時のものです。

- **第1回** 2001年10月26日(金) 津田ホール
  - ・うた (福原徹 作曲/初演) [笛: 福原 徹]
  - ・長い旅 (福原徹 作曲/初演) [笛: 賣山左衛門 (人間国宝)、福原 徹]
  - 義大夫
  - ・関寺小町 (三世鶴澤友次郎 作曲)  
[浄瑠璃: 竹本駒之助 (人間国宝) / 三味線: 鶴澤津賀寿、鶴澤寛也 / 笛: 福原 徹 / 蔭囃子: 福原賢太郎]
  - ・千の太陽、万の扉 (福原徹 作曲/初演)  
[笛: 福原 徹、福原徹彦、福原 寛 / 小鼓: 藤合円秀、梅屋雅一 / 大鼓: 藤合清之、望月太津之]
- **第2回** 2004年4月3日(土) 紀尾井ホール
  - ・Kyrie (キリエ) (福原徹 作曲) [唄: 今藤政貴 / 笛: 福原 徹]
  - ・間奏曲 (福原徹 作曲/初演) [笛: 福原徹彦、福原 徹]
  - ・Dona nobis pacem (ドナ・ノビス・パーチェム) (福原徹 作曲/初演)  
[合唱: NHK東京児童合唱団 / 笛: 福原 徹]
  - ・トキ (福原徹 作曲/初演) [笛: 福原 徹]
  - ・千年の桜 (福原徹 作曲/初演)  
[笛: 福原 徹 / 謡: 小早川 修 / 太棹三味線: 鶴澤津賀寿 / ピアノ: 中川俊郎]
- **第3回** 2006年11月2日(木) 紀尾井ホール
  - 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より
  - ・シャコンヌ (J.S.バハ 作曲/福原徹 編曲/編曲初演)  
[笛: 福原 徹 / チェンバロ: 中川俊郎]
  - 地歌
  - ・ゆき (峰崎勾当 作曲/福原徹 補曲)  
[笛: 福原 徹 / 蔭囃子: 福原賢太郎]
  - 男声独唱・笛・尺八のための三章
  - ・草の祈り (蓬萊泰三 作詩/福原徹 作曲/初演)  
[独唱: 小早川 修 / 笛: 福原 徹、福原徹彦、福原 寛 / 尺八: 善養寺恵介]
  - 笛・太棹・ピアノのための
  - ・三重奏曲 (福原徹 作曲/改訂初演)  
[笛: 福原 徹 / 太棹三味線: 鶴澤津賀寿 / ピアノ: 中川俊郎]
- **第4回** 2012年12月7日(金) 銀座 王子ホール
  - ・序曲 —能管による— (福原徹 作曲/初演) [能管: 福原 徹]
  - 長唄
  - ・黒髪 (初世杵屋佐吉 作曲/福原徹 補曲) [篠笛: 福原 徹]
  - ・solo 01 (福原徹 作曲/初演) [篠笛: 福原 徹]
    1. (静かに、強く)
    2. (激しく)
    3. (踊る)
    4. (自由に)
    5. (安らかに)
  - ・林の中にいる象のように (福原徹 作曲/初演)  
[篠笛・能管: 福原 徹 / ピアノ: 中川俊郎]
    - 第一章 月の光を浴びて立つ一本の松
    - 第二章 三本の木
    - 第三章 千年の桜
- **第5回** 2013年11月20日(水) 銀座 王子ホール
  - ・duo 05 (福原徹 作曲/初演) [篠笛: 福原 徹 / 尺八: 善養寺恵介]
  - 長唄めりやす
  - ・もみぢ葉 (初世杵屋新右衛門 作曲/福原徹 補曲) [篠笛: 福原 徹]
  - ・solo 02 (福原徹 作曲/初演) [篠笛・能管: 福原 徹]
    - 走る
    - 飛ぶ
  - ・月光と海月 (福原徹 作曲/初演)  
[篠笛・能管: 福原 徹 / 尺八: 善養寺恵介 / ピアノ: 中川俊郎]
    - I
    - II
    - III



- **第6回** 2014年11月28日(金) 銀座 王子ホール
  - 長唄めりやす
  - ・明の鐘 (作曲者不詳) [篠笛: 福原 徹]
  - ・solo 03 (福原徹 作曲/初演) [能管: 福原 徹]
  - 舞
  - ・ゴルトベルク変奏曲 BWV988 (J.S.バハ 作曲/福原徹・中川俊郎 編曲)  
[篠笛・能管: 福原 徹 / ピアノ: 中川俊郎]
- **第7回** 2015年11月30日(月) 紀尾井小ホール
  - ・越後獅子 (九世杵屋六左衛門 作曲/福原徹 編曲) [篠笛: 福原 徹]
  - ・solo 04 (福原徹 作曲/初演) [篠笛: 福原 徹]
  - 爽やかに
  - ・マクベス (福原徹 作曲 ~ シェイクスピア作 坪内逍遙訳による~)  
[篠笛・能管: 福原 徹 / 謡: 小早川 修 / 浄瑠璃: 都了中 / 囃子: 福原百之助]
- **第8回** 2016年11月30日(水) 東京文化会館小ホール
  - ・三番叟 [能管: 福原 徹]
  - ・solo 05 ヤン・シックスの肖像 (福原徹 作曲/初演)  
[篠笛: 福原 徹]
  - 無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第2番より
  - ・シャコンヌ (J.S.バハ 作曲/福原徹・中川俊郎 編曲)  
[篠笛: 福原 徹 / ピアノ: 中川俊郎]
  - ・京の夜 (六世福原百之助(四世賣山左衛門) 作曲)  
[篠笛: 福原 徹 / 蔭囃子: 福原百之助]
  - ・千年の桜 (福原徹 作曲/中川俊郎 ピアノパート作曲補佐/2016年版初演)  
[篠笛・能管: 福原 徹 / 尺八: 善養寺恵介 / 太棹三味線: 鶴澤津賀寿 / ピアノ: 中川俊郎]
    - 満開の桜 (初演)
    - 竹 (初演)
    - 皇帝の新しい服 (初演)
    - 夢は枯野を (初演)
    - 千年の桜 (改訂初演)
- **第9回** 2017年11月30日(木) 紀尾井小ホール
  - 長唄
  - ・安宅の松より (初世富士田吉治 作曲) [篠笛: 福原 徹]
  - ・solo 06 ナルキッソス (福原徹 作曲/初演) [篠笛: 福原 徹]
  - ・竹の踊  
白い月 (福原徹 作曲)  
[篠笛: 福原 徹 / 木杖・小鼓: 福原百之助]
  - ・ハムレット (福原徹 作曲 ~ シェイクスピア作 坪内逍遙訳「ハムレット」による~)  
ハムレット: 小早川 修  
オフィーリア: 都了中  
クローディアス: 小早川泰輝  
レアティーズ: 福原百之助  
エルシノア城: 福原 徹



## 徹の笛 in MUSICASA

- #1 2002年11月18日(月) ★ゲスト: 中川俊郎 (ピアノ)
- #2 2003年 1月20日(月) ★ゲスト: 賣山左衛門 (笛)
- #3 2003年 3月10日(月) ★ゲスト: 小早川 修 (謡)
- #4 2003年 5月12日(月) ★ゲスト: 藤合円秀 (囃子)  
: 福原賢太郎 (囃子)
- #5 2003年 7月14日(月) ★ゲスト: 鶴澤津賀寿 (太棹三味線)
- #6 2003年 9月 8日(月) ★ゲスト: 中川俊郎 (ピアノ)

MUSICASA (代々木上原)






2019年4月27日(土)午後3時開演 紀尾井ホール

主催=「徹の笛」実行委員会 <https://torunofue.wixsite.com/website-1>

後援=  公益財団法人日本伝統文化振興財団

JAPAN TRADITIONAL CULTURES FOUNDATION  
(有)邦楽ジャーナル

邦楽の友社

助成= アーツカウンシル東京 (公益財団法人東京都歴史文化財団) ARTS COUNCIL TOKYO 

公益財団法人日本製鉄文化財団

●制作: 日本伝統音楽振興会 黒河内 茂 ●舞台コーディネーター: 清野正嗣 ●協力: 加藤繁治 ●グラフィック: 長田 彰